○　田中三舟

朝雨や青葉にのこる月淡くゆれて涼しき風鈴の聲
やつれませし君が面輪と白百合を小雨の閨にそみて見る

○　田邊存

君も吾も露を命の花の上は知らずと云ひて洩らす笑み哉
山の上に隱者も出でゝ涼むらむこの宵の月この宵の風

○　中村鶴聲

身を飾る美くし花と若き子が胸の扉に畝彫らば足る
はちす吹く風にそと搖る瓔珞の一つ〳〵に光り露ちる

＊＊　＊＊　＊＊

夕潮のせめよす汀さまよひて
　得しうたならむ白き藻の花
神路山書を灯ともす岩の戸に
　太古生ひぬる苔の香深き

○無聊吟社句集

鹽野奇零

此處よりは身延へ三里夏野かな　白醉樓
霧晴れて金鼓の響き関の聲　同
六ヶ村祝捷かねて辻角力　同
今朝の秋友の病ひを傳へけり　同
葛の花塀傾いて人住まず　同
琴の音は離れの間なり繪燈籠　同
重藤の弓滿引いて案山子かな　同
蔓珠砂華怪談ありし屋敷跡　同
山深く迷ふ徑や木の子狩　雪舟
傾きし小挽の小屋や葉鷄頭　同
番傘の雨戸明けるや萩の花　樂水
朝寒を語り合ひけり壁隣り　同
失戀の心美くし蓮の花　奇零
川狩や昨日故山の人となり　同
氷賣る旗も古びて秋の風　同
裏山に子猿の啼きて秋の夕　同
殘る蚊や雨に淋しき草の宿　同
質店に物負ふて入る秋の暮　同
唄も出ぬ馬士の姿や秋の雨　圃
行水に五色の雲や西の山　同
碑を探る麓の岡や蔓珠砂華　同